

『溺愛執事のいじわるレッスン』

著：高月まつり

ill：明神 翼

「二カ月だ。二カ月で、天川家の一員として恥ずかしくない人間になりなさい。二カ月後に、天川家の一員としての、お披露目パーティーを開催する」

「一方的に言われても、俺には店がある」

「従業員に任せておけばよかろう」

「俺は天川家なんて知らないし、関係ない。今まで何もしてこなかったんだから、これからも俺たちにちょっかい出すなよ」

すると祖父は低く呻く。正論にどう立ち向かおうか、思案している雰囲気が見えた。

「まったく。あの男によく似た顔で言われると余計に腹が立つ。……お前がいいとしても、弟はどうする」

「俺がちゃんと育てる。両親の墓の前で約束したんだからな」

「天川家なら、最高の環境を約束できるのだぞ？ やってみたい習い事も好きなだけさせてやれるし、ペットを飼うこともできる。旅行だって、行きたいところに連れて行ってやれる。あれもこれもだめという言葉はない。すべてイエスだ」

祖父が言い切った前で、有希は衝撃を受けていた。

天川家を知らなかった頃は「今の自分がしてやれる精一杯をしてやろう」で済んだが、知ってしまった今では決意が揺らぐ。

天川家ができる精一杯と、自分の精一杯は、きっと比べものにならない。

「……二カ月か」

「グループの中枢に位置する天川家の一人として、どこに出しても恥ずかしくない立ち居振る舞い、礼儀作法、話術を完璧にこなせるか？ ああたしか、ダンスもあったな」

祖父の台詞にごくりと唾を飲む。

「兄ちゃん！ 僕、海じゃなく市民プール好きだよ。ガリガリアイスのおやつも好きだし、卵サンドも好きだよ？ 田中のおばあちゃんちにいけば猫触れるし！ お稽古事はいっぱいしたらお店のお手伝いできなくなっちゃうし……」

ああもう、そんなことを言ってくれるな弟よ。兄ちゃん、お前のためにいっぱい頑張ってるんだよ。

自分の顔を覗き込んで一生懸命話す弟が可愛い。その弟のために、今、自分ができることをしてやりたいと心から思った。

「俺が二カ月で完璧な坊っちゃんになれば、俺はまあ……ともかくとして、明希には将来のための最高の環境が約束されるんですか？」

祖父が一瞬、言葉に詰まったように見えた。困惑しているようにも見える。

だがすぐに厳めしい表情に戻って「約束する」と頷いた。

ならばためらいはない。こっちは、何も失うものはないのだ。受けて立ってやる。

「分かった。じゃあ、その下らない賭けに乗ってやるよ。立派なお坊っちゃんになってやる！」

宣言したからには、最大限努力する。

「ならば、この離れを住まいにすればいい。遠池、あとは任せた」

「かしこまりました」

悠生が一礼し、祖父は部屋から出て行った。

「……とにかく俺は、一度店に戻って、織部さんに店を頼んでそれから……」

ティーカップに残っていた紅茶を一気に飲み干して、これからのことを考える。

「織部様にはすでにお伝えしてありますし、お二人が必要だと思われるものは、すでに隣の部屋に用意してあります」

澄まし顔の悠生に、有希が「いつ？」と尋ねると、「あなたが寝ている間に」と言われた。

「あー……そうかよ！ でも、織部さんには連絡をしたい。店は一人じゃ無理だから、もしバイトを雇えるなら」

「それでしたら、すでに一名、ヨシノ生花店に派遣しました。花や樹木に詳しい青年ですので、問題はないかと」

こういうのも、いたれりつくせりと言うのか？ 言っているのか？

有希は心の中で悠生に突っ込みを入れつつも、彼の仕事の速さに驚いた。

「えっと、その……」

「今度は、私の話を大人しく聞いていただけますか？」

「聞く。というか、そもそもあんたが不穏なことを言わなければ、俺だってあんな態度は取らなかったっ！」

「思わず見惚れてしまいました」

「見惚れるって？ 花に？」

すると悠生は曖昧な笑みを浮かべて「さて」と話を切り出した。

「改めて自己紹介させていただきます。私は遠池悠生と申します。あなたには今から二カ月に立派な令息になっていただきます。これからよろしく願いいたします。私が指導教育するのですから、成功したも同然です。よかったですね」

「あ、芳野有希です。よろしくお願いします。……あんたが先生？」

「あんたではなく、あなた。もしくは遠池さん、または先生と呼んでください。どんなに言葉遣いを矯正しても、ふとした瞬間に素が出ることも多いです。まずは、その素を出さないように徹底的に言葉遣いを直しましょう。それから……」

「待って。少し待ってくれ。遠池さんは一体なんなんだ？ ええと、どういった職業？」

「トータルコーディネーターです。執事もいたしますが、青少年に礼儀作法を教えることも少なくありません。天川様とは去年から専属執事として契約をさせていただいております」

一分の隙もない、凜とした立ち姿を見て、「なるほど」と思った。自分の一目惚れは正しかっ

たのだと、なんの根拠もないがそう思った。

明希は「羊さん！」と言って、悠生に「執事です」と言葉を直されている。

「拉致までできるんだもんな……なんでもできるマンってヤツか。まあいい。俺はもう決めただ。これからよろしく頼む」

有希は右手を差し出す。

悠生は少し困った顔で笑い「そういうときは、よろしく申し上げます、ですよ。有希様」と言ってから手を握った。

「僕も握手する！」

明希は椅子から降りて、兄の手の上に自分の手を乗せる。

「ゆーせーさんよろしく申し上げます！ 僕、ここから友達のところ遊びに行っていていい？」

「お花屋さんからこの屋敷までは離れていますので、車で行きましょう」

「僕、今、自転車に乗る練習してるから、自転車で行ってもいい？」

これには、有希と悠生はすぐさま「ダメだ」「いけません」と答えた。

「お友だちと遊ぶときは車で。自転車の練習は庭でいたしましょう」

「うん」

「返事は『はい』と言いましょう」

「はい！ 僕、探検してきてもいいですか？」

明希は悠生が「どうぞ」と言う前に、大きな扉を開けて部屋から出て行った。

「俺より明希の方が名家の令息に見えるよな……」

「そうですね。しかし私は、困難な課題に燃えるたちですので、あなたを立派な紳士にして差し上げますよ」

「令息ならともかく、紳士なんてなあ。でも、あのジジィに馬鹿にされっぱなしっていうのも悔しいから、紳士でも令息でもなってやるよ」

「言葉遣いへのペナルティを考えなくてはなりませんね、有希様。態度ががさつなだけでなく、言葉遣いもなっていないとは。この先……」

「思いやられるって？」

「まさか！ むしろ教え甲斐があって嬉しいです」

悠生がニヤリと笑った。

初めて会ったときは、白薔薇の化身とかスーツを着た王子様とか思ったのに、今の表情は猛獣を躰ける「調教師」だ。

有希はおもわず身の危険を感じて、一步下がる。

「私が怖いのですか？ 可愛いですね」

「……二十歳の男に可愛いってなんだよ」

「あなたは私よりも八歳年下ですから、可愛いで通ります」

悠生が一步踏み出す。

彼が近づいてくるたびに有希は後退るが、とうとう壁に追い詰められた。

端正な顔の男に見下ろされて、しかも逃げられないように両手で「壁ドン」されている。

「パーソナルスペース、無視すんなよ。男でも、あんたぐらい綺麗な顔だと……こっちはいろいろと困るんだよ」

心の準備をしてないからっ！　　というか俺、どうなっちゃうんだよっ！

有希は悠生の顔を間近で見ながら焦った。

「困ってもらえると嬉しいですね」

とてもいい笑顔で言われて混乱する。

「俺は嬉しくないんだけど……っ！　　なあ、いつ弟が戻ってくるか分かんねえんだからさ、いい加減離れてくれよ」

恥ずかしいし、緊張で心臓がドキドキする。

見つめ合っていないと視線を逸らしたら、今度は耳元で「いいペナルティを思いつきました」と囁かれた。

「おいっ！　　囁くなよっ！」

よく爆死をしなかったと、有希は自分を褒めた。それだけ、彼の囁き声は体と心に甘く響く。

「間違っ言葉遣いをしたらキスをしていただきますよ」

今、なんて言いましたか？　　この男は。

有希は視線を悠生に戻し、口をぽかんと開けた。

「一度目は大目に見ます。何をどう直せば分からないでしょうから、私が丁寧に説明しましょう。ですが、同じミスを二度したら、ペナルティです。私にキスをしていただきます。よろしいですね？」

「なっ！　　えっ？　　よろしくないですっ！　　まったくよろしくないです！　　なんで俺がっ！　　あんたに……じゃない、あなたにキスなんて……っ」

「もしや、キスは初めてなんですか？」

この男は、諸悪の根源だけでなく悪魔だ。こんな男に一目惚れをしたなんて情けない。

有希は「だったら悪いかよ」と唇を尖らせる。

ああまたきつと、言葉遣いがなっていないと言われるのだと思っていたら、返ってきた言葉は「それは素晴らしい」だった。意味が分からない。

「キスが初めてということは、有希様はまだどなたとも性交していないということでしょうか？」

なんでそんな嬉しそう顔で聞いてくるんだよっ！　　この悪魔っ！　　人でなしっ！

有希はヤケになって「その通りですよっ！」と大声を出した。

「最高です、有希様」

「俺は最悪の気分です。未経験の俺がそんなに素晴らしいですか？　　俺は恥ずかしい」

「今は『俺』でも構いませんが、公の場では、『俺』ではなく『私』とってください」

悠生が、壁に押し当てていた手を離し、有希の頬を優しく撫でる。

「分かった。覚える……」

「素直なのはいいことです。私としては、もう少し抵抗していただく方が楽しいのですが」

「いや、そっちの方が絶対に怖い目に遭う」

「怖い目とは？ 何をされると思っているんですか？」

悠生の指が、有希の頬から顎を辿って唇に触れた。

「いや、何をされるかまでは想像してなかったけど……あんたは綺麗なのに得体がしれないから……」

「はいペナルティ。『あんた』ではなく『あなた』。もしくは『遠池先生』です。私はあなたの教師ですから」

ペナルティって……。

悠生が笑顔で、自分の頬を指さした。

そこにキスをしろというわけか。

「……俺のファーストキスが。こんなところで……」

「頬へのキスで嘆かないでください。ファーストキスなど簡単ですよ」

悠生の頬にキスをしようと、ぎゅっと目を閉じて顔を近づけたのに、次の瞬間、唇に何か柔らかいものが触れた。

悠生の唇だと気づいたときにはもう遅い。

「もっと高度なキスは、またの機会に」

体が先に、事態を把握した。

有希はヘナヘナとその場に座り込み、顔だけでなく首から上を真っ赤にする。

「俺の初めてを本当に奪った……っ！」

おそらく一生の思い出になるであろう初めてのキスは、「季節は問わないが、時間は夕暮れ。遠くで電車が走る音が聞こえる川沿いの土手。もしくはさざ波が打ち寄せる砂浜。さり気ない会話が途切れて、でも見つめ合ったまま目を逸らすことができずに、いつしか顔を寄せ合い、目を閉じ……」という、細かなシチュエーションを考えていた。

なのにこんなところで。しかも相手は同性。しかもついさっき一目惚れを自覚した男だ。

自分は「今はお友だちのままで付き合っていければ……」と思っていたのに、あっという間に最終ハードルを飛び越えてしまった。

しかも腹が立つことに、悠生はそういうことに慣れている。

「なんで、こんなことに……」

夕暮れも川沿いの土手も砂浜もない。

有希が実感しているのは、悠生の唇の柔らかさだけだ。

人の唇って……こんなに柔らかくてふわっとしてるのか。あと温かい。キスって気持ちいいんだな……。凄くよかった。

だが、その唇の持ち主が悠生であることを思い出し、低く呻く。

喜びたいのに素直に喜べない。

「そんなに嫌でした？」

「平然と感想を求めるなよっ！」

「気持ち悪かったですか？」

悠生がしゃがみ込み、有希と視線を合わせて尋ねる。

「気持ち悪くなかったから……こうして自己嫌悪に陥ってるんじゃないかっ！ 諸悪の根源のくせに！ 俺のファーストキスを奪いやがったっ！ 一生の思い出が台無しだっ！」

初めてだけど、多分、これだけは言える。

悠生としたキスだから気持ちよかったのだ。誰とでも気持ちよくなれるわけがない。自分はそんなふしだらな人間ではないと、有希は心の中で胸を張る。

だがそれを悠生に言うのは少し悔しかった。

「触れるだけのキスでも気持ちよかったですね？ それはよかったです」

「よくねえよ！」

「……触れるだけで気持ちがいいなら、違うキスをしたらどうなってしまおうんでしょうね？ 有希様」

唇を押しつけるように耳元で囁かれて、「あ」と変な声が出てしまった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>